

# 子どもの作文から教えられたこと

## ぼくいやだ

きのうの日曜日、お父さんとお母さんとぼくの三人で海水浴に行きました。空は青く、気温は三十度をこえていました。

途中、道路工事のため、車を止めて待ちました。

お父さんは、車を誘導している人を見ながら、「こんなあついでここで働ける？」と、ぼくに聞きました。

それで、「ぼくいやだ。」

と、思わず答えてしまいました。

するとお母さんも、

「そうよね、しっかり勉強すれば、日曜日はお休みでエアコンのきいたところでお仕事ができるわよ。」と言いました。

やがて、車は動きだし、誘導の人はおじぎをして送ってくれました。

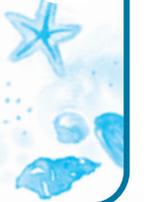
「・・・」

この作文は、小学生が家族とのふれあいの日常を書いたものです。

読まれての感想はどうですか。特に作文の最後にある『・・・』から作者の気持ちをどう想像しますか。

子どもの幸せを願わない親はいないでしょう。しかし、その「願い・思い」が時にはまちがった職業観や人間観を子どもに持たせてしまうことがあります。危険な仕事などに携わる人たちが『学校でしっかり勉強しなかつた人』などと考えることは、職業に対する偏見につながります。

親と子どもの関係は、強い信頼関係で結ばれています。信じている親からのことばは、小さな子どもにとっては大きな影響力があります。子どもが幼く、物事を見る力が十分に育っていないければ、親のことばをそのまま信じてしまうこともあるのです。



このため、子どもが間違っただものの見方や考え方をしってしまったら、一つの価値観でしか物事を見ることができなくなってしまうたりするかもしれない。そして、このことが偏見となり、いじめや差別行為へとつながっていくこともあるのです。

子どもの「多様な価値観」を育むためには、親や周囲のおとなが物事に対する自分の考えや価値観を再点検し、広い視野で子どもと接していくことが必要になると思います。

### 参考

島根県教育委員会発行

「人権教育事例集」

社会教育編」

市人権推進課(教育庁舎1階)  
☎ 32・2122  
FAX 33・3525  
Mail: jinkensuishin@city.komatsushima.tokushima.jp

## 市民文芸

## 花みずき歌壇

(330)

松並敦子・選

紅梅は米粒ほどの蕾つけ初春待てり庭石を背に

赤石町 田原トシ子

《評》米粒ほどに蕾のふくらんだ紅梅は、きつと初春(お正月)には紅桃色の花を咲かせてくれることだろう。共にその日待つ田原さんの気持も伝わってくる。「庭石を背に」の結句で、庭の広さや紅梅の立ち位置も見えてきてリズムよく詠まれた叙景歌である。

六歳はブルース・リーになりきってぬんちゃくを振るドラゴンへの道

横須町 山崎 泰子

大輪の花開くごと渡り鳥夕べの空は茜に染まる

江田町 深田 伴子

コミックに描きあげられし似顔絵のあまりにも似て少しくなく

横須町 福島 夢栄

迷い猫この寒空に捨てられて帰る当てなしや我が家に住みつく

瀬戸町 松下 玉枝

向かい風の中ペダル踏み買物に好物見つけて袋いっぱい

坂野町 橋本千代乃

日の峰を毎朝拝みて水清し氣候温暖の小松島を愛す

小松島町 川人 豊子

日々老いる身体に優し紅葉狩りわたしの穴場は日赤の庭

神田瀬町 大西カヲル

一年の役目を終えて花散らす師走半ばの皇帝ダリア

田浦町 太田カツミ

どこまでも晴れわたる冬空に点となり翔ぶ一羽の鳥は

田浦町 西 照子